

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

〈日本語解説〉 「カナダ西海岸の華人移民組織とアイデンティティ：
バンクーバー客属崇正会と黄氏宗親会を例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-30 キーワード: 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009546

〈日本語解説〉「カナダ西海岸の華人移民組織とアイデンティティ —バンクーバー客属崇正会と黄氏宗親会を例として」

本稿は唯一、本書が「南側地域」として定義していない国を対象としている。しかし、これまでの論考から分かるように、「南側地域」の客家は近年、北米やヨーロッパへと再移住するようになってきている。特にインドとラテンアメリカの客家が再移住する最も主要な地の一つがカナダである。本稿は、「南側地域」からカナダへの移民については、直接扱っていない。そもそも、2015年に『美国客家（邦訳：アメリカの客家）』（林祥任・羅煥瑜・馮啓瑞、広西師範大学出版社）が刊行されたアメリカの客家研究とは異なり、カナダの客家研究は意外にもあまり蓄積がない。それゆえ、まずはカナダの客家にまつわる基礎データから収集しなければならない状況になっている。こうした状況を鑑みて、自身がカナダ出身の客家であるマーク・ウォンに依頼し、まずはカナダの客家をめぐる概況と歴史について論じていただくことにした。彼は、カナダの客家研究者アナ・ケリー、バンクーバー客属崇正会の前会長であるピーター・チョンとの共同研究により、本稿を作成した。本稿は特にバンクーバーに焦点を当てている。その概要は次の通りである。

- 華人のカナダへの移住は、1858年以降のことであり、当時のゴールドラッシュと鉄道建設における労働力の提供が移住の主な原因となっている。移民の主体は広東省の出身者である。やがて彼らは、次第にバンクーバーなどで中華街を形成するようになった。
- 戦後、特に1967年からは華人の移民が急増したが、その主体は香港や台湾の出身者である。特に戦後から1990年までの移民のうち香港出身者が約3分の2を占めており、他は台湾、中国本土から移住している。香港移民は、イギリスから中国へ領土が返還される前の1986年から増え、1994年にはクライマックスに到達した。他方で、新移民は中華街の外に居住しはじめ、中華街は人口が減少して商店も経営の危機に陥った。
- 初期の広東省からの移民には客家も含まれていた。言語や文化が異なる国に移住するなかで客家は人和会館を結成し、さらにその基礎のうえで1970年にバンクーバー崇正会の設立が提唱された。1974年にバンクーバー崇正会は正式に設立し、現在に至っている。この会は麒麟団も創設し、年中行事のイベントなどもおこなっている。本稿は、バンクーバー崇正会の歴史や活動についての概要を紹介している。
- 他方で、バンクーバーでは、客家の血縁団体も組織された。その1つがバンクーバー江夏黄氏宗親会である。この会は、1913年に成立した黄雲山公所、1922年に成立した黄江夏総堂を母体とし、1972年に結成された。バンクーバー江夏黄氏宗親会は、800名のメンバーを抱えており、最も多いのは台山、続いて開平、新会、中山、鶴山となっている。本稿は、この団体の概要についても説明している。

本稿は、カナダ客家研究の出発点の1つとなりうるデータを提示している。その基礎のうえで今後研究を進めていかねばならないのは、第一に、バンクーバー以外、例えばトロントなどの地における客家の紹介と考察である。また第二に、「南側地域」との関連でいうと、インドやラテンアメリカから二次、三次移住した客家の研究である。特に21世紀に入ってから、カナダではトロントを中心として、ジャマイカなど中米出身の客家が「客家」や「客家文化」に関するイベントを積極的に催すようになっていく（この点については柴田論文を参照いただきたい）。こうした「南側諸国」からの新移住と崇正会や宗親会を結成している旧移民との関係はどうか、またカナダにおける異なるタイプの客家の出会いが「南側諸国」へどのような影響を及ぼしているのか／いないのか、興味はつきない。序論で述べたように、現在の「南側地域」の研究は、特定の国／地域という枠ではおさまりきらない。そこでカナダをはじめとする北米、ヨーロッパ諸国がどのような役割を演じるようになっていくのかは、今後の「南側地域」の客家研究において注目すべき論点の1つとなるであろう。2021年の第31回世界客家大会は、カナダで初めて開催されることが決まった。今後、カナダはますます客家や客家研究の注目を集める国になっていくことが予想される。本稿はカナダの客家研究を今後進めていくための貴重なデータとなりうる。

(河合洋尚)